
疑う円環

夏樹 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疑う円環

【Zコード】

Z0682W

【作者名】

夏樹 真

【あらすじ】

私立菖蒲ヶ淵高等学校。その教室に囚われた10人の生徒達。教室の椅子に手足を拘束され、話す事以外を制限された彼らの前に現れたのは、このクラスで自殺したはずの少女だった。少女が告げる、復讐ゲームのルールとは？拘束された生徒達は脱出できるのか？

プロローグ（前書き）

初投稿作品なので、ゆっくり進めていきます。
あまり過激にならないと思いますが、残酷な描写も含むと思います。
ミステリ作品を描いています。
しうがない読んでやろうと思つてくれた方は、よろしくお願ひします。（9月4日若干修正）

プロローグ

夜の学校。

それは、普通の生徒達の立ち入れない領域である。

何度もホラー映画の舞台になつたように、日常と全く違う姿を見せる学校はそれだけで、不気味な存在感を発している。

あるいは全く知らない恐ろしい場所より、よく知つてている場所のいつもと違う一面を見たとき、人は恐怖を感じるのかもしれない。

学校は閉鎖された領域だ。教育過程を終了した者にとつては、不可侵の領域であり侵入すれば間違いなく不審者となる。

機械警備の導入等により、一般家庭とは比べ物にならないほど堅牢に守られたこの領域は、守られている場所だと認識されている事で、逆に周囲の感心が薄い。

既に守られている場所で何か起きても、異常事態な筈がない。異常事態ならば、既に警備会社に連絡されている筈と考えるのだ。

人は自分と関わりのない場所に感心を持つたりしない。たとえ感心をもつても、きちんと守られているはずのそこに干渉しようとは、しない。

したがつて、一度侵入を許してしまえば、そこは教師や生徒が登校していく朝になるまで誰の干渉も受けない世界となる。

私立菖蒲ヶ淵高等学校。

県内では有数の進学校で、毎年有名国立大学に何人も送り込んでいる。

ただし、県外にまで知名度が届いているわけではないので、一般的な知名度はさして高くない。

せいぜい数年前に甲子園に出場した位だろうか、

それも初戦敗退だったため地元で騒がれたのみだったが。

1学期のテストも終了し、後は夏休みを迎えるだけ。蝉の声はまだしないものの、木々の青々しさが示すように季節は確実に夏に向かっている。

生徒にすれば、夏休み前で待ち切れずじれったい期間。先生にすれば、ようやく1学期が片付いてさあ、夏休みの準備に入ろうという時期。

これが昼間であれば、生徒が何人居たとしてもおかしくはない。

しかし今は、夜だ。夜の教室に10人もの人がいる・・・・。

いや、正確に言えば、教室の中に拘束されていた。

目覚めは最悪だった。

悪夢を見ていたわけでもなく、誰かにいきなり叩き起こされた訳でもない。

目覚めたのが僕のベッドだったなら、むしろ心地いい目覚めだったかもしない。

しかし、現実にはこの先の僕（雨宮 ケイ）の人生で、今日以上に悪い目覚めは無いと思う。

「なんだよ。これ？」

目に映るのは、うすぼんやりとした暗闇の中、目の前に据えられた椅子と、そこに座る制服姿の人間。それに、自分の体に巻かれたテープだった。

いきなり過ぎて、状況が理解出来なかつた。真つ暗な教室。何となく自分の教室である事が分かる。なぜ、僕はこんな暗い教室に居るのか？

でも、そんな事より大きな問題があつた。

「いきなり、何で？？手が！いや、手だけじゃない足もか！」のつ！

僕は、手足と胴体を（つまりは全身を）固定された状態で目を覚ました。

とにかく、もがいてみる。普通の人はそうだと思うが、17年生きて来た人生の中で、手足を拘束された事など初めてだ。

どうやら、僕は椅子に縛り付けられているようだつた。教室に普通にある椅子だ、鉄パイプと木の板を組み合わせたような、いたつてシンプルな椅子。

腕は後ろに回され、交差した状態で固定されている。足は椅子の足に固定されている。さらには、胴体も椅子の背に固定されている。

固定に使われているのは、百均にも売つているような普通のガムテープだ。

全力で動かしてみると、ギシギシと音が鳴るだけで、手足は全く動く気配がない。

知らなかつた。ガムテープつてこんなにも丈夫だつたんだ。これだけ強力なガムテープを作る技術者は凄いと思うが、今だけは

恨みたい。

僕は、凄く身近なありふれた道具で、
ありふれていな状態に拘束されていた。

ひとしきり、脱出のために出来そうなことをやつて見た。といつても、手足を拘束された状態では、出来ることなど限られている。まず、手を引き抜け無いかやって見て、1分であきらめた。それこそ、血が止まりそうな位きつく締め付けられているため、ちょっとやそつとでは、引き抜けそうになかった。

次に椅子ごと移動して何か、テープを切断する道具を探そうとしたが、そもそも椅子を動かす事が出来い。

全身固定された状態では、反動もつけられない以上しじょうがなかつた。

動く事ができなくなつて、逆に冷静になつてきた。動いて出来ることがない以上、それ以外を考えるしかない。

僕は、僕と同じ格好で拘束されているみんなを見た。

そう、教室には僕を含めて10人の人間が、椅子に固定され、向き合つように半径4メートルほどの円形に、配置されていた。
ちょうど均等に正10角形とでもいうべき形にならんでいた。
円は教室の中心に配置され、中央部に並べられていたであろう机は、壁際に整然と並べられていた。

そして、僕以外の9人はみんな僕のクラスメイトだった。

プロローグ（後書き）

文量はちょっとずつ増やせたり細々とします。

まだまだ、書き進めるのが遅くて。。。。

分かりにくい所があれば修正しますので、指摘して下さい。

第一話 状況把握（西脇ケイ）（前書き）

比較的余裕があつたので続けて投稿します。

第一話 状況把握（爾當ケイ）

明かりの無い教室に拘束された僕たちは、彫刻のように動かなかつた。外に立つてゐる街灯や、学校に隣接しているマンシヨンの明かりで微かに教室が照らされている。10人もの人間が手足を拘束され、円形にならべられた姿は、まるで聖書や神話に出てくる罪人のようだが、僕らの格好が制服のままで、

素人劇団のようにどこかアンバランスで、狂つた雰囲気を持つていた。

僕以外は未だ目を覚ましていないようだ、僕も最初は大声をあげて、ほかのやつらを起こそうとしたが、睡眠薬でも盛られているのか全く目を覚まさない。

しばらく声を出していたが、結局諦めてしまった。

せめて、誰かを起こして相談したかったのだけど、手足が動かないつてのは、こんな事でも不便だ。

今すぐにでもここから逃げ出したいけど、なにもできない。状況が煮詰まりすぎて、僕の頭は回らなくなり、考えているのかボーッとしているのか分からなくなっていた。

時間は・・・・。しばらく経つて、ふと時計を見上げる。もうすぐ8時半だろうか、目を覚ましてからまだ20分ほどしか経っていない。それでもひどく長く感じた。

クソ！いつもなら家でゆっくりドラマでも見ている時間なのに。

「うつ、うへん、うあ

隣の席から声が聞こえた。良かつた生きてる。

自分の隣の席のやつでさえ、生きているか不安になるほど静かに眠っていたのだ。脈を取つて確認したかったのだが、それも当然叶わなかつた。

「う、は、あれ?」「は、つて…?え…?なんだこれ?」

よつやく目を覚ました富内ツトムがさつきの僕のよつに騒ぎだした。ツトムは、僕の中学からの友人で、キャラは分かりやすく言えばクラスのお調子者だ。

良く言うならマードメーカーか、こいつがいるだけで場が明るくなるとかそんなやつだ。ちなみに頭は悪かつたりする。僕だつて頭の出来はそれほど良くないが、テスト前に僕に毎度頭を下げてチーン店のハンバーガー一食分と引き換えにノートを借りていく。

「なんだよこれ?わけわからんねーよ!ガムテープかこれ!クツソ!取れる!取れるって!!!」

「無理だよそれ、全然はずれないんだ。」

「…。ケイか?おいちょつとコレははずしてくれよ…いたずらか?どうなつてんだよ…!」

ツトムは、まるで僕が縛り付けたかのように睨みながら叫んだ。

「無理だつて、僕だつて両手両足縛られてんだから。せっせんざん外そうとしてみたけど無理だつた。ツトムのやつの方が緩いかもしないし頑張つてとしか言えない。」

ツトムはサッカー部で鍛えているし、身長も180以上でガタイも

良い。明らかに僕より筋力がある分、無理やりにでも脱出できる可能性は高いだろ。

僕はなるべく冷静に言つたのだが、よけいにハイタッチとしたよつだ。

「なんだよそれーー！ケイおめー薄情だなーー！誰だこりないだずらしてやつーー！ブン殴つてやるーー！出て来いよーー！」

ひたすらに喚き散らすが、一向に反応は無い。しばらくするとツトムも叫んでももがいてもどうしようも無いこと悟つたのかだんだんと落ち着いてきたようだ。

「おい、ケイ。これどうなつてるんだ？」

「僕に聞かれても全く分からぬよ。田覓めたらこんな状態だったのは、ツトムと一緒に。ホント何なんだか。誰がやつたか知らないけど、じれだけ騒いでも反応無いし。全員が起きるまで待つてるのも？」

「全員つて、ここにいるのうちのクラスの奴らだけか。この教室も良く見りやうちの教室だな。」

「僕らをこんなにした犯人は分からぬけど、ただのいたずらじやない気がする。こんなに騒いでもみんな全然起きないのは多分睡眠薬でも飲まされてるからだと思うし、とにかくしばらくは落ち着いてじつとじつとしか無いと思つ。」

本当は、両手でお手上げのポーズでもしたいところだが、手が動かないのと、表情だけで諦めのニコアンスをつくる。でも、良かつた話す相手がいるとそれだけで少し安心する。

「しょうがねえな。ケイ。みんな起きたら起こしてやれ。」

「ひでおこー寝るのか？」

「じょうがねえだろ。手足動かねんだし。頭使つのは苦手だし、全員起きるまで頭も使いやうがねえだろうしな。」

やつぱりとあつたことじられる僕の前で窮屈やつぱりだした。

「このバカ本当に眠つてるし。」

「この言ひのせ、豪氣といつのだらうか、それともバカと言ひのだらうか？」

それから、10分程の間にみんなが次々に起きた。

結局、ツトムも殆ど眠れなかつたようだ。案外強がつていただけかもしれない。

起きた時のみんなの反応は多かれ少なかれ僕の時と変わらなかつた。みんなぼーっとした様子で目を覚まし、まず手足が縛られている事に焦つて暴れようとする。しばりくすると、周りに僕らがいる事に気づいて少し落ち着く。

そしてみんな、首をかしげるといった感じだ。割と落ち着いて話していられるようになつたのは、あれからしばりく経つけど、教室になんの変化も無いからだ。僕らは完全に放置されていくようだつた。

とりあえず、全員が田を覚ましたようなので、落ち着いて話し合おうという流れになった。（結局拘束から抜け出せた人はおらず、全員拘束され首から上だけ動かしての話し合いだ。）

落ち着くと言つてもみんな拘束されてどうしようも無い状態なので、富原さんは泣きだしてしまつたし、氣の弱いコシヒコも今にも泣きそうな顔をしている。

「あー、落ち着けつて富原。泣きたいつて気持ちも分かるけど、とりあえず俺らには話す事しかできねえんだから。脱出する方法とか話あおひげ。」

とつあえず、とこつた感じでツトムが口火を切つた。
ムードメーカーのこいつもさすがにこの状況でみんなを笑わせる事もできずまじめな調子だ。

「そ、う、よ、さ、つ、ち、や、ん。今は泣いてないで落ち着いて。考えれば何か抜け出す方法あるかもしれないわ。」

ツバサがそう声をかける。因みに、さつちゃんとは富原さんの事だ。
富原サトネ。それが彼女のフルネーム。
富原はまあ今時数少ないほど大人しくて、おしとやかな娘だ。伏し目がちで男子全員に対して距離を置いている所があるし、女子でも連んでいる仲間は少ない。
色白で、いかにも”かよわい”ですよといった雰囲気だ。実際にどうなのかつてのは良く分からぬけど。

ツバサは、そんな富原さんの数少ない仲間だ。もっとも、富原さんから話す姿は、あまり見たことがない。もっぱら、ツバサの方が気

を使いながら話題を振っているイメージだ。

三条ツバサ。さばさばした性格で、割と誰とでも仲良くしている。まじめな話も、バカな話も乗れるオールラウンダーでクラス委員もやっている。

クラスの中で成績も良く、先生の受けも良い。かなり隙のない超人だ。低身長で童顔で中学生に間違えられるというのが、コンプレックスらしいが、それはそれで可愛いという評価もある。

幼く見られないように、髪をかなり伸ばしているので、腰に届くかというほど長い黒髪だ。

「せうは言つても何を相談する? 今の状態じゃ身動きとれないしきる事も限られていくが。」

まだ泣きやまない高原さんをよそに、大神君が話を進める。大神タダシ。クラストップの成績で、5教科全て得意という化け物。ただ、変わった性格で、あまり多くの人とどうか、人とあまりつるまない。

いつも本か携帯を開いていて、ほとんど人としゃべってない日もあるんじゃないかな? 細身でインテリ眼鏡。ちょっと近寄りがたく、おたくっぽいという評価を受けている。

「何を相談つてそりや、 脱出方法だろ!」

ツトムが突つ込む。が、大神君はボケるタイプでもないし、今のはボケじやないだろ。

「いやいや、今のはボケじゃねえってバカかおめーは。」

「ボケじゃないのに突っ込んだツトムに南谷が突っ込みをいれる。
南谷ユウキ。ツトムと同じくサッカー部所属で、エースだ。クラス
では、僕と同じくツトムのボケに突っ込む役割をしている。
短髪で長身。金髪なので、見た目はいかついが、話しゃすくていい
やつだ。

「いや、わ、わかって和ませようとしてだな。俺様のボケが逆に
レベルが高すぎたか。」

「いいって、いいって、無理して『まかさない。』

こんな時なのにこの二人が喋っていると漫才でも見てている気がする。

「アンタ達それくらいにしなよ。脱出て言うけどさ、自力で脱出つ
てのは難しいかもね。アタシは無駄に体力使いたくないし。ねえ、
ツバサ。学校つて警備員とか巡回して無いんだっけ？」

大神君の疑問を補足する形で山里さんが続けた。

山里ユウコ。クラスの女子の中心人物で、何かと目立つ。モデル体
型で制服のスカートもかなり短くしているし、メイクやアクセサリ
ーに關してもうるさい。

うちの高校が真面目なだけに、そこまで派手に髪を染める人はいな
い（せいぜい茶髪まで）その中で、かなり明るい金髪に染めている
彼女は、かなり目立つ。

全ての学年には知られているが、逆に先生にも目をつけられている。
悪目立ちとでも言つか、ツトムとあわせてクラスの2バカで通つて
いる。

付き合つているわけでもないけれど、お似合いな馬鹿夫婦だ。もつともそう言つと一人とも怒るのだけど。

見た目軽そつだが、彼氏はいない。告白されても全部振つてゐるらしい。本人曰く、私に釣り合う男はまだいないとのことだ。

「どうだらう？さすがに、学校のそういう部分についてまで私は詳しきないからなあ。シズちゃんは？何か知つてる？」

「私も、あんまり詳しくは。ツバサちゃんが知らない位だし。基本的に守衛の人人が居るんだけど、校舎内の巡回はして無いと思つ。」

近藤シズク。生徒会の書記を担当している。いたつて普通な性格にいたつて普通の容姿。で、いたつて普通に可愛い。

一応クラス公認の僕の彼女だ。ただ、シズクの方が恥ずかしがつてクラスではあまり、一緒に行動しない。

どうして、彼女がこの場に居るのかと最初は驚き焦つたが、シズクだけが拘束されたんじゃなく。僕が一緒に居られて良かつたと考えるようにしてゐる。なんとか一緒に脱出しないと。そう思い、シズクの方を見る。

シズクも僕の方を向いてうなずいたように見えた。さらに相談を進める。

「そうすると、誰かに見つけてもらつてのも望み薄かな。みんなが、起きる前に僕は結構声出したけど見に来る人は居なかつたし。」

「うーん。まあそりゃそつよね。学校つて広いからここで大声出しても、近くの家でも聞こえないだらうじ。そうすると、手詰まりかな。」

ツバサの発言を最後に、みんな黙ってしまった。思い思いに考えているようだ。

体を動かせないって事は出来る事のほとんどを奪われているって事だ。

声以外の手段を持たない僕らに出来る事は少ない。

「ねえ、私達がこういう状態になつていいって、きっとみんな気づいてるよね。」

沈黙を破つたのは、佐々木ヨシノだ。陸上部で特に活発なタイプで、健康的な日焼けが目立つ。

今は制服だが、運動着が抜群に似合つ。授業もジャージで受けたりする。

運動するときに、髪を纏めるのがチャームポイントだ。ちなみに幼馴染なんだが、

小さい頃は僕の方がいじめられてた氣がする。家は近所だが、いまではそれほど深いながりが無くなっている。

「うん?みんなって家人とかつて意味か?」

「やうだよ。こんな時間まで家に帰らなかつたらきっと、さわぎになるよね。そしたら『』にも探しに来てくれるかもー。」

「アタシのことは無理だなあ。この時間まで帰らないとか良くあるし、8時台とか余裕で遊んでるしょ?でも、他の人は違うかな。富原とかどう?アンタ大事にされてそうだけど。」

まだ、涙が消えていないがさつきよりも落ち着いた調子で、富原さ

んが答える。

「…………うう・・・ぐすつ。私の家でじの時間・・じや・・・まだ、やわざになつて無いと思つ。でも・・・」

「じのまま、10時過ぎまで家に帰らなければ・・・やわざになると思つ。・・・ひの親の事だし警察にも連絡するかも。」

「とつあえずは、じのまま待つしかないつて所か。富原の所に限らず、誰かの親が警察に連絡するかも知れないし、10人も帰つて無いとなりや。まず学校に確認に確認に来るだらうしな。」

南谷がまとめる形になつた。とつあえず、何にも出来ないけれど方針は決まった。

それだけで、少し安心できるものだ。ホッとした空気が流れる。

「あの、ちょっといいかな。」

今まで、黙つていた。ヨシヒコが発言した。

鈴木ヨシヒコ。気が弱くてクラスでも目立たない存在。富原さんの次に泣きそだつたが、さすがに女子の手前泣くまではいかなかつた。

そして、みんなが目をそむけよつと、避けていた事を口にした。

「時間になる前に犯人が来たらどうよつへ。」

第一話 状況把握（雨宮ケイ）（後書き）

登場人物の紹介完了。

だいぶ駆け足ですが・・・。

技量不足で口調でキャラを区別するのが難しいのと、シチュエーション上同じ空間に10人が居る状況を避けられないのが、

課題。つまくできるよう頑張ります。

第一話 犯人考察（三条ツバサ）（前書き）

ちょっと私用で資格の試験がありまして、しばらく書いてませんで
した。

とりあえず、メインになる所までは急いで持つていきたいと思つて
います。

次回くらいには、話の趣向が見えると思います。

第一話 犯人考察（三條ツバサ）

「時間になる前に犯人が来たらどうしよう？」

その言葉を聞いた私達は、みんな停止してしまいました。

私の名前は三條ツバサ、この学校・・・私立菖蒲ヶ淵高等学校の2年A組の生徒です。

一応クラスの委員長をやっていて、みんなからはツバサと呼ばれています。

そして、いまトンデモナイ状態に陥っている最中です。

私と私のクラスメイト9名が、夜の学校の私たちの教室で拘束されているのです。

正直わけが分かりませんね。

例えば、これが女子だけ拘束されていて場所が町はずれの倉庫なんかであれば、

大いにパニックになるでしょうけれど、それでも筋は通ります。

世の中に変態の男の人は沢山いるのです。この町に居てもおかしくありません。

だからこそ、この状況は不自然です。私たちを拘束し、しかし何もしない事に何の意味があるのでしょうか？

考えが脇道に逸れてしまいましたね。鈴木君の発言に戻りましょう。

鈴木君の発言はもつともな事です。

私も、その可能性について考えたし、頭の良い大神君なんかも当然その事は考えていると思います。

それでも、あえて言わなかつたのは、さつちゃんがパニックになるかも知れないという配慮があつての事です。

もつと場が落ち着いてから議題にしようと思つていたのですが・・・。

ついジトつとした目で鈴木君を見てします。

まあ、彼も大分追いつめられてゐるみたいだし、じついう発言は仕方ないかもしません。

今もみんなが黙つてしまつた空氣に耐えられずに、目線を下に向けていますし。

「は、犯人がまだ近くに居るつて事なの？」

震えながら、佐々木さんが言います。

その問には、鈴木君では無く、大神君が返しました。

「近くに居る可能性はあるな。」

だれかが、ヒツつという掠れた悲鳴を上げます。

「この状態、俺たちが拘束された状態で放置されているのが腑に落ちない。

普通に考えたら、拘束だけが目的とは考えられない。

この後何かをするつもりで、犯人がその準備をしていくという事は十分考えられる。」

確かに、私と同じようにみんなも違和感を感じていたのか何人かの

人が頷いています。

「おい！なんでお前はそんなに冷静なんだよー犯人が近くにいるかもしねーんだぞ。」

横から南谷君が噛みつきます。強気な口調とは裏腹に大分焦つているみたいですね。

「まだ、可能性の話だ。この状態で放置されているのがそもそも、おかしいと言えばおかしい。俺たちが自力では抜け出せない事に自信があつたのかもしけないが、普通は見張り位は残すだろ。」

そう考へると、犯人は少しだけ外すつもりでどこかに行つて、トラブルで・・・・・。

まあ、これは警備員に発見されたとかで、帰れなくなつてゐるかもしないし。
単純に俺たちを朝まで縛るだけのイタズラの可能性もまだ消えたわけじゃない。」

「そういう事を言い出したら、何でもありだな。

ここから脱出するためには、どう考へてもドアの前を通る必要があるんだし、

例えば廊下で見張りをしてくる可能性もあるんじゃないか？」

「兩面の言つ通りだ。どれにしても憶測にすぎない。

ただ、廊下で見張つていたのなら、俺たちの起きる時の騒ぎに気付かないはずがない。

いくら縛つてゐるとは言え、ガムテープだし万が一もあるだろ。不安になつて見にくる訳でもないつてのは、遠くにいる証拠だと思う。憶測だが。」

さつきから顔面蒼白のさつちゃんに氣を使つてか、大神君はさう言って締めくくりました。

意外と気づかいのできる人なのかもしませんね。これだけ、非現実的な状況にありながら坦々としているのも或る種の才能なのかもしません。

「大神、アンタちょっと冷静すぎるよ。こういう状況だと頼もしいけど、逆に怖いくらい。」

「そう言われても、これでも焦つているよ。ただ焦つても出来る事が無いから

極力落ち着こうと思つてているだけだ。それに、もし犯人と格闘なんて事になつたら俺は役に立たないぞ。

そうなつたら、富内君と南谷君に活躍して貰わなきやならないだろうし、適材適所だ。」

この状況だつたら誰も格闘なんて出来ないだろ、という突つ込みは入りませんでした。

冷静になろうとしてか、普段以上に表情を無くした、大神君の顔は、暗闇と相まって、こう言つては失礼だが・・・実験動物を見つめるマッドサイエンティストのような

とても不気味な表情に見えました。

その雰囲気に巻き込まれないようひと、私は口を開きます。

「ともかく、現状脱出の方法がないといつ事に変わりは無いわね。犯人が戻つて来る可能性についての議論はどうやら結論は出せそうにないみたいだし。

ともかく、落ち着いて待ちましょう。今はそれしかないわ。」

それで。一通りの議論は終わったようです。

普段から、委員としてまとめる立場であつた事がプラスに作用したのか、みんな私の発言に従つてくれるようでした。

とりあえず落ち着いてよかつた。

近くの通りを車が通過していく音がします。

普段だつたら気にも留めない雑音がいやに気になります。
まるで、この教室内と外の世界が別物であるかのように遠く感じる
から、耳につくのでしょうか？

この教室の外の世界は、きっと昨日と変わらずに、普段通りに動いているのでしょうか。

願わくば、このまま犯人が帰つて来ずに、誰かが助けに来てくれる
と嬉しいのですが。

そんな私の願いは、残念ながら叶う事は、ありませんでした。

あれから、散発的にみんな会話をしようとはするものの、いつ犯人が帰つてくるかも知れないという

状況では、気楽な会話を続ける事もできずに結局は黙つてしまつと
いう事を繰り返していました。

そして、誰かがもう、9時になつたねと言つた時でした。

廊下に足音が響きました。

私達はみんなその瞬間に黙つたので、足音はかなりはつきりと聞き取る事ができました。

それほど響く事のなく聞こえるその音は、しかし確実に私達の居る教室に向かつて来ます。

「みんな！まだ寝てるフリをしよう。もしかしたら、起きてるのバ

レナイ方が良いかもしない。」

突然、雨富君がそう言って、田を閉じました。

みんなも慌ててそれに続きます。私も田を閉じました。

確かに、足音の主が犯人だつた場合、まだ寝ていると思わせた方が得策かもしません。

この状況を作つた理由とか、について何か漏らすかもしませんし。

廊下の足音は、この教室の前で止まると躊躇無く、この部屋の扉を開きました。

私はまだ田を閉じたままで。

足音はそのまま、黒板の前の教卓に進んでいきます。

この時点で助けの可能性は無くなりましたね。

普通に助けに来た人ならこの時点で無言なのはあり得ませんから。

「みなさんのが起きているのは分かつていますよ。先ほどの声も聞いていましたから。さあ、寝たふりをやめて起きて下さい。」

声の主は予想に反して若い女性です。

拘束なんて真似をするからてつくり男性だと思つていたのですが、外れたようです。

まあ、犯人の一味で見張り役という可能性もありますが。

声の主が女性という事に少し安心し、田を開くとそこに居たのは、全身黒い布を纏つて姿を隠した謎の人物でした。

正直、あっけにとられてしまいました。雰囲気としては、物語に出てくる中世の黒魔術師とでも言いますか、全身にすっぽり被つたローブのような物で全く顔が分かりません。

体格はどうやら女性の声に違わず身長が低いですが、全体的に

瘦せているのか太っているのかさえ分かりません。

「おい、お前いつたいなんなんだ！！」

全員が驚きで言葉を失っていた状態で、一番先に意識を取り戻し、謎の人物に問い合わせたのは南谷君です。

その声を聞いて、謎の人物は確かに笑つたような気がしました。

「こんな格好でゴメンね。でも、みんなもう忘れちゃったのかな、ひどいな。同じクラスなのに。」

「ふざけるな！！俺はこんな事をするクラスメイトなんて知らないぞ！！」

「ひどいな南谷君は。私だつて。みんな気づかない？」

みんな何も反応しません。

確かにその声は同年代の声の気がします。でもクラスメイトの顔を思い浮かべますが、この声は知らないと思います。その少しの間に、その人物は教壇から降りて、私達の座っている円の真ん中にやつてきます。

少し手を伸ばせば届いてしまいそうな場所でその少女は宣言しました。

「誰も、覚えていないなんてショックだわ。私の名前は如月 ヤヨイよ。」

私の肩がビクッと震えました。忘れてくても忘れられないその名前は、先月このクラスから姿を消して、そして、そして理由不明の自殺をした少女の名前だった。

第一話 犯人考察（三条ツバサ）（後書き）

後から見直して変だつた所は隨時加筆・修正します。
章や、話数もいじるかもしません。

といつか、たぶんいじります。

どうも、後から見ると直したいところが多くて困ります。
ちゃんと、推敲しろよつて思いますよね。

・・・・・がんばります！

第三話 犯人の告げる言葉（話内シートム）（前書き）

少し時間が空きましたが、これでようやく導入の完了です。
微妙に修正。

第三話 犯人の告げる言葉（室内シットム）

「誰も、覚えていないなんてショックだわ。私の名前は如月 ヤヨイよ。」

真つ黒な格好のその人物が告げた言葉に俺たちは声を無くしてしまつた。

なにから説明すりやいいかな？

こういう場合は、自己紹介とかか？

いやまあ、俺自身の心の中の独り言なんだから順番なんて俺が勝手に決めりやいいのか。

それでも順番は大事か？

ただでさえみんなからバカと呼ばれる事が多いんだから、こっちだつて自分が

馬鹿だつて事位分かつてる。

それでも、愛される馬鹿だつて胸を張つて言えるけどね。まあそれだけ馬鹿でもあんまりいつもいつも馬鹿にされたいわけじゃないんで、

なるべく、事の順番とかやり方は守らうつてわけだ。

それで自己紹介するなら俺は、こここの高校のクラスメイト室内シットムだ。

俺の性格とかは、既になんとなく伝わってる気がするから省く！ イヤ、面倒な事は嫌いなんだ。

とにかく俺は気がついたら、夜に自分の教室で縛られてて、周りには俺の他に縛られてる奴らが、9人も居て。

脱出できない代わりに犯人らしき人もいないから、

なんとか、みんなで脱出の方法とか考えて、といつても俺はあんまり考えが浮かばなかつたから議論は任せてたんだけどな。

そしたら、いきなり9時になつた時に犯人が現れて。

で、その犯人があの”如月 ヤヨイ”つてのはどういう事だ。

如月ヤヨイっていうのは、ほんのひと月前までこのクラスに居た女の名前だ。

そつ、居たつていう言い方で分かると思つが今はもう居ない。

自殺したんだ。

テレビや何かで自殺の報道を見ると違い、まさかうちの学校の俺の居るクラスで自殺が起きるなんて完全に想定外だった。校門に報道のカメラが群がつていて、事件当日はへりなんかも出てきて大騒ぎになつて、

俺もさすがにその時は、クラスに笑いを提供する訳にもいかず。おとなしくしていたもんだ。

そんなのがまだ一ヶ月前だ。

どつちにしたつて決まつてる。”如月 ヤヨイ”が死んでる以上目の前のこいつは如月ヤヨイじゃない。

「ふざけるなー」このクラスの如月ヤヨイは死んだんだよー！それも自殺だー！だからこにいる訳がない。」

「ひどいなあ。富内くんも。私はここに居るんだけど、まあ、こつ

そつ生き返ったでもいいし、実は幽霊ですつてこいつの
面白くていいね。」

黒いヤツ（今の段階ではこいつを如月ヤヨイとは呼びたくない）は、
自分の事のはずなのに興味の無い口ぶりで答える。

そして、一人でククツと笑った。俺は、その笑いに凍りつく。

「冗談じや無い。こんな状況で面白いなんて事あるかー！」

「ね、ねえ。本当にヤヨイちゃんなの？ねえ、私、サトネ分かる？」

「

「やあひらんよ。わひわやん、親友なのに忘れるはずないでしょ。」

「や・・・ヤヨイちゃん・・・ぐす・・・。生きてたの・・・良か
つた。」

そういえば、富原は如月と仲が良かつたな。だから、黒いヤツの言
葉をそのまま信じてしまっているのかもしれない。

「富原、まだこいつが本当に如月かは分からんぞ。」

大神から、鋭い警告が飛ぶ。それは、間違いなく富原の耳に届いた
はずだが聞こえていない。

「ねえ、ヤヨイちゃん。・・・私・・・どれだけ泣いたと思ひ。・
・寂しかった・・・悲しかったよ・・・。
でも、こつして会えて嬉しい。」

「ふふ、ありがとうわいちやん。でも、ごめんなさい。私あなた
たちを・・・ゆ・る・せ・な・い」

いきなり空気が変わった。それは、一瞬だけだつたが狂気に狂つた声色だつた。

しかし、その声も次の瞬間には普通の声に戻つてゐる。酷く恐ろしい感覚、俺はこの黒いヤツが前にもまして、得体の知れなく感じられた。

「ちょっと、長い話になるよ。それもつまらない話ね。それでも聞いてもらひうけど。

私は、如月ヤヨイ。まあ、疑いたい人はどうぞ。私が誰であつても、私があなたたちにやつてもらう事にかわりはない。

そして、拒否権も無いわ。まあ、あなたたちのこの状況で拒否権とか言い出せたらある意味すごい強者だけど。

話は、そうだな。やつぱり、みんなの為に私が自殺した所から話そ
うか。

私の自殺について、みんな詳しいことは知らないよね。自殺した状況から、動機から、時間から、何も知らされていなければなんだ。うちの家庭で、親が教師つていうのもあって、身内で、しかも学生で自殺者が出るなんて恥なんだよね。

だから、世間に對してもいろいろと状況を隠しているといつわけ。

黒いヤツの話はよだみなく進む。自殺の話をしているところのどこか楽しそうだ。狂つてやがる！

「で、私の自殺の動機なんだけど。はつきり言つて、この中の人にいじめられてたのが原因なんだ。気付いてなかつたでしょ。

私が生き返つて来た理由なんだけど、正直未練とかあつてさ。その人に復讐つてのもあるんだけど、それだけじゃなくてね。」

自分のクラスメイトの中にいじめの犯人が居て、そいつに復讐した

いなんて事をあまりにあつたりと、

今日の日経平均みたいなつまらな「コースのよう」淡々と言われて俺は反応できなかつた。

は？なに？

うちのクラスでいじめで、それが原因で如月が自殺して、それで・・・

・。自殺したはずの如月が生きていて復讐しようとしている。

なんなんだそれ――――！

なさけなくもあるがそんなもんは、本人同士でやつてくれ、俺みた

いな清く正しい一般人を巻き込むなよ・・・・。

「自殺させた奴もだけど、クラスメイトで有りながらいじめに気づいてくれなかつた貴方たちも憎い。

それほど、巧妙に行われてたわけじゃ無いから気づいてすれは気づいたはず。

なのになんのんきに学生生活を送つて来た。ふふつ、自分は何もしていのになんでこんな目に合つんだとか思つてゐるでしょ。何もしなかつたからよ！

私に声をかけてくれるだけでも良かつた！

ほんの少しいたわつてくれるだけで良かつたのにだれもそんな事すらしてくれなかつた！

生きているならいいじゃないか？ふざけないで！私は一度死んだのよその重さを考えなさい――！

黒いヤツ・・いや、ここまできたら偽物だとしても如月と呼ぶか。如月はそこで興奮しそぎたのを抑えるためか、一度深く息を吸つた。

「という訳で、貴方たちには罰を下します。といつても、ただ単純に殺すなんて事はしません。

今からでも考えて、誰が私をいじめていたのか気づいたら助けてあげる事にします。」

「大事な事なんで良く聞いてください。」

今から、1時間時間後・・・10時になつた時点で貴方達10人の
中から、いじめの犯人であつたと思う人を提示してもらいます。
自分で名乗り出ても、多数決でも何でも構いません。ただし無回答
は許されません。

もし、犯人であつてもなくとも、私はその人に罰を与えます。次の1時間後にさらに一人を指定してもらいます。

貴方たちの中にはいしこれを1時間ごとに繰り返して行ってそして、めの犯人が居なくなつた時点で、

貴方達を開放します、どうです？公平でしょ？いじめの犯人を先に指摘してしまえば、他の人は罰を受けずに済むのだから。

11

それだけ告げると、教卓から離れ扉に向かつて行く。誰も何も話せない。

「頑張つてください。私も友達は罰したくありませんから。そうそ
う一つだけヒントを。イジメの犯人は2人いますよ。ふふふ・・・・・

6

その言葉を残し、如月は去つた。

一人目の確定まで残り 50分

第三話 犯人の告げる言葉（富内シーム）（後書き）

わかる方には、分かると思いますが、この小説内で犯人が提示したルールは、人狼というゲームを参考にしています。

人狼 *bbbs* というゲームのできる掲示板もありますので興味のある方は、試してみると面白いと思います。

第四話 めぐらの議論（ヨリノウハ）

その真っ黒い女が去った後、教室は沈黙に包まれた。沈黙を破つたらあの、訳の分からぬゲームを認める気がして、それで誰もしゃべれないのかもしれない。

あの女の事を、如月のヤツだなんてアタシ」と山里 ノウハは認めはしないけど、

死んだ人の名前を騙られるつてのは本当に、気分の悪いものだつた。冗談だとしても、ついていい冗談じゃない。

冗談を言つた方だつて、言われた方だつて嫌な気持ちになる。あの女にとつては何かしらの意味を持つてているのかもしれないけれど。

ああ、本当に気分が悪い。

本当なら今日だつて、今この時間だつて外で遊んでるはずだつたんだ。

ここに連れられてきた経緯をはつきりと思い出せないのだけど、今田はここに居ない友達とずっとファミレスでおしゃべりするつもりだつた。

最近のドラマの話とか、最近告白された時の話とか、

話に飽きたら、ファンシーショップを廻るか、ファミレスでバイトしてゐる友達をひやかしに行こうか、それともカラオケかな？

そんな、普通の事でぐだぐだと悩むつもりだったのに、なんのこの仕打ちはー！

如月ヤヨイについては、正直アタシの印象は良くない。

そこには、宮原サトネと一緒にいつも暗い感じで居たのを覚えて

いるだけだ。

ファッショ n にも流行にもほどほどに付き合つけど、根っこは眞面目のいい子ちゃん。

中学の頃までは、アタシだつて成績優秀で親からも先生からも期待されていたもんだから、

如月ヤヨイと変わらなかつたけど。高校に来てから、頭の差つてやつに気がついた。

どんだけやつたつて、敵わないヤツはいる。それが、富原サトネで、如月ヤヨイだ。

まあ、アタシがその差に気づく頃にはもう学業優秀ないい子になるのは諦めてたし、なにより高校生活を楽しむので忙しかつた。派手目な遊びに惹かれていつたアタシと如月ヤヨイの気が合つわけ無いから、極力クラスでも寄らないようにしていた。

無駄な衝突は避けるべきだよ。それこそ時間の無駄だから。せつかくの青春の時間をそんなつまらない事で浪費するなんてバカだよね。

そういう訳で、アタシは如月ヤヨイについては良く分からないんだけど、さつきのルールは気になる。

”如月ヤヨイが誰かにいじめられていた”

ここまでは、まだいい。クラスが一致団結していく、いじめなんて一切ないなんて事は所詮先生の頭の中だけだ。

ひとクラスに40人も人が集まつてゐるんだし、何か衝突があつてもおかしく無いじゃない。

アタシはよく知らないけど、あの子は確か吹奏楽部に入つていたはず。

クラスに他にも吹奏楽部の女子は居たはずだから、クラブ活動のなかで何か衝突が合つたって事も考えられるし、とにかく可能性だけは排除できない。

”1時間ごとに私達の中から犯人を選ぶ”

これが良く分からぬ。

そもそも、何がしたいんだか。アタシは、あの黒い女が如月だとは思つてないから、

如月が死んだ今になつて、犯人探しをする事になんの意味があるんだろう？

しかも、あの女は犯人を知つてゐるんだ。それなら、アタシ達に犯人探しをさせる意味なんてまどろっこしい事しないで、犯人だけを罰すればいい。

アタシが考え込んでいる間にも誰も一人も言葉を発しなかつた。窓からわずかばかりに、月明かりが差し込んで、アタシ達の影を床に伸ばしている。

影の形だけを見れば、縛られてなんかいながら、ただ丸くなつて座つている図。

まあ、でもこんな風に丸くなつて座つていると悪巧みでもしている絵みたいだ。

世界を裏で操る参謀達の秘密の集会とか……。

くだらない。

くだらない事を考えてないで、そろそろ先に進むべきだ。

みんなも考えているのだろうけど、結局相談しないことには始まらない。

ふと、時計を見上げる。

前髪が気になつたけど、じける事ができないから、しょうがなく頭を振る。

隣のツバサがビクッと反応した気がした。

9時20分。

あの女が言つてた時間までは40分。だけど、40分なんてあつといつ間だろう。

何をしゃべればいいのかも分からぬけど、議論が始まれば収束しない気がする。

それでも、アタシは声を出した。

「黙つても仕方ないしわ。ともかく出来る事を相談しようよ。」

「相談・・・・・・・しないとダメだよね。」

ツバサが相槌を打つてくれた。

でも、他の人の反応が薄い。

「相談つて何の相談よ！ アイツに！ あの如月さんを名乗つた得体のしないヤツに！ 誰を差し出すかつて相談でしょ！ ！」

突然弾けるように、近藤さんが叫んだ。

目に涙まで浮かべて、アタシを睨みつける。

普段大人しいから、逆に迫力がある。この子こんな風な性格だったんだ。

アタシが追加で説得する前に別の声が遮つた。

「シズク！ 落ち着けつて。お前が反発したいのは分かるけど、ユウコだつて、

そういう反発があるのを分かつてあえて言い出してくれたんだ。10時の時点で、誰を犯人として指名するかつて問題はあるけど、それ以外にだつて話さないといけない。

みんなでなにも話さないまま、10時になつちゃうのが一番いけない。

とりあえず、落ち着いて。みんなで話しあおひ。」

「・・・でも、ケイちゃん・・・私。」

「大丈夫。大丈夫だよ。最悪の場合でも、お前を一人目にはしないから。」

「ケイちゃん・・・嫌。イヤ・・・最悪なんて。」

南宮の言葉で、近藤さんはさりげなく顔を歪めてしまった。

「おい、彼氏！近藤さんの心配煽つてどうする。
近藤さん。その最悪にならないために、これから相談するんだ。こんな風に縛り付けて監禁して、おまけに1時間ごとに1人罰を取れるなんてゲームじみた事を考えるサイコ野郎だけど。

説得するつていう方法もあるかもしれない。

罰つて言つても、まだその中身は分からんだから、法えすぎるのも良くないしね。

ケイのセリフと被つちまつけど、大丈夫だ。」

深刻になつてしまいそうな雰囲気を、ユウキが修正した。
スポーツ馬鹿に見えてこつこつ氣がきくんだよね。南谷つて。

「サンキュー！ユウキ。シズク、落ち着いて、な？最初は、俺たちの話を聞くだけでいいから。な？」

「ケイちゃん。私……私……。」

それっきり、近藤さんは黙ってしまった。

残念だけど、気を使う余裕は無いから先に進めをせりむおつ。

「コホンッ！ それじゃあ、もう一度言つナビ。出来る事を相談しよう。といっても、話を絞らないといけないけど。大神。何か意見ある？」

アタシは、大神に振る。一いつ時は、頭のいいやつにお願いする。こういう状況をアタシじや上手くまとめるな。

「……そうだな。疑問点はいくつかある。

- 1・アイツは本物の如月なのか？
- 2・ゲームじみた方法を取るのはなぜか？
- 3・1時間ごとに与えられる罰とは何か？
- 4・アイツの語った事は事実か？特に、俺たちの中にイジメの主犯がいるというのは本当か？
- 5・以上を考えつつ10時になつた時にどう対応するか？

といつた感じか。

正直言つて、分からぬ部分だけでのまま、考へてもラチがあかなそうだな。

アイツの正体や、罰の内容については、今は考へてもといつか。考へる事すら無理なくらい情報が無い。

とりあえず、10時になつた時の対応から考へるか。誰か意見はある？

「さつき、説得案を出した以上。説得する案について話合いたいんだけど。みんなどう思う？」
俺は、やってみるだけの価値はあると思う。話が通じるかは、分からぬいけど。」

「説得ねえ。アタシにはあんまり話が通じそつには思えなかつたけどなあ。それでも、やつてみるだけなら良いんじゃない。この状況で、なら相手と話して何か引き出すしかないし。」

「説得その物は、俺も賛成する。相手の体格から見て直ぐに暴力に訴えるタイプでも無いし、会話は成立するだらうな。ただ、どう説得するかは、また別に考える必要があるだらうな。」

南谷、アタシ、大神が続けて、説得を支持したので、場は説得する方向に傾いたようで。

みんな口々に、私も、僕もと賛成を告げた。

最後に大神が決を取り、全員一致の形で説得を試みる事に決まった。

この議論の時点でも、10分経過した。

今の時刻は、9時30分だ。

あと30分だ、あと30分で、説得の内容と、犯人を誰にするかを決めないといけない。

「大神、さつきどう説得するかって言つてたけどそれは、どういう意味？」

「ああ、あれは犯人が如月を自殺に追い込んだ犯人を・・・」こう言うと混同するな。あいつの言い方をそのまま使わせてもらうと。如月は如月本人の自殺の原因になつた犯人を恨んでいる。

だから、こんな犯罪行為をしたのだろう。だが、先ほどのルールを考えるとそれを見逃した友達も恨んでいる。しかし、友達の方には犯人を当てれば生き残れるように配慮している。

ここから考えて、如月を説得するには、犯罪行為であるこの教室に監禁されている俺達全員の開放は認められなくとも、犯人意外を開放してくれるようには、説得できるかと思つたんだが・・・。

いや、もちろん全員開放を求めて説得すべきだ。ただ、状況によっては犯人意外の開放としなければならないかも知れない。」

大神は取り繕つたが、

その議論は・・・。先ほど近藤さんの指摘していた、誰かを犠牲にする。議論だ。

もちろん、建設的で反論できないほど、まともなより多く生き残るための方法論としては正しい方法だ。

「別に、大丈夫でしょ? ここに犯人なんて居ないでしょ?」

言葉とは裏腹に、不安そうな顔で佐々木さんが全員を見渡す。

微妙な沈黙が続いた。本当はみんな、アタシ達の中に犯人がいるとう・た・が・つ・て・いる。

ただそれを口にはできない。

アタシ達はともに捉えられた仲間だし、この場でみんなを敵に回す

発言をしたら最悪1人目の犯人が自分になつてしまふかもしけない。

「佐々木さん。犯人の居る居ないは、関係無いんだよ。如月が俺達の中の誰かを犯人だと思っているって事が大事なんだ。それを否定できない以上、真実は分からぬけど犯人として開放されない人が出てしまうかもしない。そう言っているんだ。それとね、俺は如月への説得は、宮原一人にお願いしたいと思つてゐる。」

大神はまた、一步進んだ議論に飛び込んだ。

・・・・・ 一人目の確定まで残り 25分

第五話 クラスマイトの順位（近藤シズク）

「私、やってみます。」

そう告げた富原さんは、普段のか弱い彼女からは、信じられない位強い目をしていました。

南谷君の始めた説得の話は、富原さんが受け入れた事でちよつと落ち着いたみたいです。

みんなが議論を進めてくれている中で申し訳ないけれど、シズクが気になっているのは一番はケイちゃんの事です。

いや、こんな状況でケイちゃんに甘えたいとか思つてゐるわけじゃないんだよ。

いつもみたいに、腕にひつつきたいとか、手を握つて欲しいとか、あわよくば抱きしめてほしいとか・・・。

まあ、考えてないわけじゃないんだけど。こんな時だから、心細くなつちやうのはじゅうが無いし、彼氏に甘えたくなるのも

守つて欲しいと思つのもしようがない事だとは思つのです。

さつきシズクが泣いてしまつた時から、何度もこいつを見て気にしてくれているのも

分かつて、だからシズクは何とか落ち着いていられるんだよ。

「具体的に細かい事まで決める事はできないと思つ。さつきまでの態度から考えて、あの黒い女が

本物であれ、偽物であれ、如月として振舞つのは間違いないから、如月に話かけるつもりで接して貰えればいいと思つ。

相手がちょっと矛盾した事を言つても、そこには突つ込まないであ

くまで、如月にこんな馬鹿な事をやめて
もううつよつよつてスタンスで説得すればいい。」

「大神、さすがに丸投げはキツイだろ。俺としては、なるべく相手
に話をさせるのがいいと思う。

さつきの話だけだと、あいつが俺達にしたい事を一方的に宣言した
だけで、本当は誰に復讐したいとか、
なんでこんなやり方をしてるのかに疑問が残るぜ。だから、如月が
本当にしたいことは何なのかを聞き出して。
その答えに合わせて、危険の無い方に誘導してもううのがいいと思
う。富原は大変だと思うけど」

「ありがとうございます。大神君。南谷君。でも、任せて、私が一番ヤヨイの
事わかつてゐるから。」

「任せてしまつて、ごめんなさい。お願ひね。さつちゃん。」

「頼んだよ。富原。」

「あんまし氣負わなくていいぞ。リスクあるし、やばかつたら富内
ヨロシクって言えば繋げてやるから！」

三條さん。ケイちゃん。富内君が続けて声をかけます。

「結果についての文句はアタシは言わないさ。みんなで決めたんだ
から。」

「うめん。よろしくね。」

「お願ひするよ。がんばつて。」

山里さん。佐々木さん。鈴木君も続けます。しまった。気が付けばシズクが最後だ。ちよつと、まとめっぽい事を言わなくちゃいけないだろうか？それとも、和ませるために明るい感じがいいかな？みんな私が何か言つのを待つてゐる気がするし、しょうがない。恥ずかしいけど何か言おう。

「富原さん、お願ひするわ。私とケイちゃんのためにも。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

しまつた！微妙な空気になつてしまつた。

これだから困る。シズクは笑いを取るのとか無理なのについ、狙いに行つてしまつた。

しかも、天然で言つてゐると思われてゐるみたい。ケイちゃんの顔が引きつつてゐる。

いやだ。もう、顔を隠したい。

こんな事で手を使えない事を意識しなきゃいけないなんて。

「ま、ま、まあ。雨宮夫妻と俺達のために、頼むよ。でも。無理はしなくていいからさ。

それと、ここからは話変わるんだけど。もう一つ決めなきゃいけない事がある。」

先ほどの流れを引き継いで、大神君が話をリードしてくれる。良かつた。あの空氣のまま固まつて、気づいたら時間になつたら最悪だもん。

9時50分あと10分しか無い。

みんなの顔にも真剣さが戻ったみたい。

まあ、しらけさせてしまったシズクが言つ事でも無いんだけどさ。

それより、大神君が言つて いる決めなきや いけない事と いうのは、やつぱりアレの事だろつ。

”誰を犯人として指定するか”だ。

富原さんの説得が上手くいけばそれでいいんだけど。

そうとは、限らない場合にどうするか決めておかないと いけない。

「やつぱり、誰かを選ばないといけないんだよね。」

「説得が成功しない事も考えられるもんね。そりだよねやつぱり。」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

どうしても会話が続きません。

やつぱり、みんなこの中で誰がいじめをして いた犯人なのか考 えて いるので しょうか？

それとも、誰が犯人なのは、関係なくて誰なら”罰の実験台”にさせても良いかを考えているので しょうか？

不意に寒くなつた気がして、肩を抱こうとして無理だと気付く。体を固定されているためか、いつもより体が冷えている気がする。季節的に寒く無いのはいいけど。

こうして、嫌な考えを思い浮かべてしまつた時に体が動かない事はそれだけでストレスよね。

シズクはなんてことを考えてるんでしょう！

このクラスメイトの中で誰なら見捨ててもいいかを考えるなんて…！見捨てられていい人なんて居ないのに…

でも、まだ死にたくない。

そう。この夜で、とばつちりで死にたくは無い！

まだ17歳なんだ。これから、もつといこう的な事を出来る年なんだ。

それは、クラスのみんなも一緒になんだけど。でも、やつぱり死ぬには早すぎる。

自分は死にたくない。

ケイちゃんにも死んで欲しくない。

いつも仲良くおしゃべりするツバサさんも、死んで欲しくない。

後の人は？

死んでいいとは思わないけど、正直そこまで仲の良くない人もいる。

宮内君とかは、話した事はあんまり無いけど。いつも楽しく盛り上げてくれる人だから、こっそり笑わせてもらつている。

山里さんは、近寄りがたい所があるけど、綺麗だし、弱いシズクと違つて見習いしたい所もいっぱいある。

佐々木さんは、本当にいい子だし。ケイちゃんの幼馴染だし、ケイちゃんのためにも選べないかな。

宮原さんは、関わり薄いんだけど。如月さんを説得するためには居てもらつた方がいいと思う。

大神君・南谷君・鈴木君は良くわからない。

普段クラスで関係することがほとんど無いし、この前喋ったは4月なんじやないの？つてくらいに喋つた覚えがない。

まあ、今日の話の感じだと鈴木君は殆ど発言しないし。

残るんだつたら大神君や南谷君が残つてくれた方が……。

・・・・・。

結論が出せてしまった。

クラスメイトに順位を付けるなんて！と思つていながら、シズクにとつて、居なくてもいい人が決まつてしまつた。

鈴木ヨシヒコ君。

よく知らないという理由だけで選んでしまつて申し訳無いけれど。いいの？こんな簡単に、クラスメイトを切り捨てて、それつて最低の事じやないの？

何も決まらないうちに時間が過ぎてしまつ。

”そろそろ、誰か決めないと”と言おつとして、ふと考へてしまつた。

シズクが鈴木君を選んでしまつたように。

シズクやケイちゃんを選ぶ人もいるんじゃないの？

全員を見渡す。

みんな真剣に考へている顔をしているけど、頭の中でもうきみたいにみんなを值踏みしていると思うとぞつとする。

ふと鈴木君と田があつた気がしてとつたに田をそらす。誰かに疑われる事を考えたら。

最初に、『私は鈴木君が良いと思う』なんて言つのは自殺行為だ。
みんなに、近藤さんは人を犠牲に出来る人だと思われてしまう。
鈴木君からは、当然恨まれるから反対に『近藤さんが良いと思いま
す』と言わでしまうかもしない。

動けない。

何を言い出しても、議論が進まないか結局マイナスになってしまつ。
そうか、大神君とか南谷君とか、今まで議論を引っ張つてくれた
人たちも

それに気づいているから。今は何も言えないんだ。

どうしよう? 誰か選ばないと。

それもみんなに納得してもらえる形で。
どうすれば?

どうしよう?

「ダメだ。もう、時間だ。出たとこ勝負しかない。」

大神君が、くやしそうに声を出す。

全員が時計を見る。

長針は既に1-2の位置に到達していた。

第六話 告げる名前（南谷コウキ）

「ダメだ。もう、時間だ。出たとこ勝負しかない。」

大神が、くやしそうに声を出した所で全員の目線が時計に向いた。

長針が1-2の位置にある。

「くそつーー！んなの決められるわけねえだろ」

俺は思わず舌打ちする。

俺達が時計に気付くと同時に廊下から足音が聞こえたからだ。
本当に時間に忠実で、じつちの都合なんて考えてない無慈悲な足音
だ。

「落ち着いて、大神君。南谷君。なんとかして、・・・みんなで乗
り切りましょう。」

委員長の言葉で、少し心を落ち着かせる。余談だが本当は、三条は
クラス委員ではあっても委員長じゃないんだが、
俺は三条のキャラから勝手に委員長と呼んでいる。

しかしそれも、直ぐに消えてしまう。

パタッ、パタッ、

という味気ない、特徴の無い足音が廊下から響く。
一定で淀みないその足取りと、自分の呼吸がリンクしていく気がす
る。

それほどまでに、呪詛に意識が集中されている。今はせつと、教室3つ分ほど後うだ。

みんな足音が一歩ずつ近づくにつれて
緊張して行くのが分かる。

俺だつて緊張している。

富原が失敗してしまえば、この中の誰かが罰される。
罰の内容は分からぬけど、俺の考えだと最悪、死ぬ事もありえる
と思う。

普段は、頼りない、存在感の無い富原だけど。今は、お前に全てか
かっている。

頑張れ・・・頑張つてくれ！

無責任にそんな事を願う。

そんな事を考えながら、さつき委員長があえて”みんなで”と言つ
たのは、富原にフレッシュシャーを
かけないための気遣いだったのかな？なんて、場違いな事が頭の中
を流れた。

パタツ、パタツ、トツ。・・・・・・・・ガラツ。

如月は、さつき去つて行った時と全く同じ出で立ちで現れた。
罰するなんて告げたのだからつい、禍々しい死神の鎌のような物や、
キラリと光るナイフなんかを持っているかと思つたが、
ぱつと見た限りじゃ。先ほどと同じ黒一色のロープ姿だ。まあ、あ
の下に隠されていたら分からぬけどな。

「さて、一時間立ったよー。どうな？有意義な議論出来たかな？かな？」

誰も言葉を返さない。

如月がローブの下で、ほくそ笑んだ気がした。

「ダメだよ。ちゃんと話をして、それで思い出して貢わないとな。犯人が分からぬなら罰する人が増えちゃうからね。」

・・・・・・・・・・・・・・

相変わらず俺たちは無言だ。

宮原が動くまで、誰も動かないだろ？

ここは、アイツのタイミングに任せるとしかない。他のヤツが邪魔するわけにはいかないんだから。

「あれ？今、私がここに来た目的分かってるよね。こっちから聞かないと答えられないのかな？」

それじゃあ、聞こうかな？犯人は誰だと思ひ？

「ちょっと待つてよ。ヤヨイちゃん！――

キタツ！

如月が早々と結論を求めて来たから、しょうがない！
もひこで勝負するしかない！

頼む、頼むぞ。

みんな一人の言動に最大の注意を向けている。
近藤と佐々木、あと鈴木は耐えるように下をむいているけど後のヤ

ツは全員

二人の方を向いている。

「うん？ なにかな、さつちゃん。」

「ねえ、こんな事やめようよ。ヤヨイちゃんが戻つて来てくれて私、本当に嬉しいんだよ。」

ヤヨイちゃんが死んじゃつて、……死んじゃつたと思つてから、しばらく学校にも行けなかつたし。何やつても楽しくなかつたし、涙がね……グスッ……出なかつたの。心が受け入れられ……なくて……。でもずっと、ずっと、泣きたい気持ちが止まらなかつた……。泣けなくて。苦しくて。

私にとって、一番の親友で、何をするにもヤヨイちゃんから教わつてた私の世界はね。

ヤヨイちゃんが居ないと成り立たないそんな物だつたんだよ。だから、今私にとって一番大事なのはヤヨイちゃんなの」

「私にとっても、さつちゃんは親友だよ。」

如月の声は、とても平坦で響いているよつとは思えない。それでも、きつと響いている。こいつが、如月なら響いていないはずがない。

「ありがとう。ヤヨイちゃん。いじめに気づいてあげられなかつたこんな私をまだ親友だつて言ってくれて。私にとって、ヤヨイちゃんは心の中だから。

家族よりも大事だつて思える人だから、本当に嬉しい

真つ暗で、陰湿な教室にふさわしく無い位で、迷いなはつめりした笑顔を
宮原は浮かべていた。

「だからね、こんな事やめよつよ。こんなやり方良くないこよ。」

「親友の貴方が私を止めようとするのね。」

平坦だがどこか怒りを感じさせる口調に変わった。

「違つよ……ヤヨイちゃん……一緒にやつひいて言つてゐるの。」

「一緒に何をやるつて言つの? クラスの仲間と楽しく高校生活を? くだらないし、出来るわけないわ。今の私にはもうね。」

「自分をいじめてた人を許せないから?」

「やうよ」

「自分がいじめられていた事実に気付きもしない人が許せないから?」

「やうね」

「やつか……。」

「もう、分かったでしょ。説得してもどうしようもなにって、今日

の為に下準備もしている。

転がり始めた石はもう止まらないわ。何かを壊すまでね。」

・・・・・

「良かつた。じゃあ、この復讐は諦めないんだね。」

・・・・・

今は、宮原は何と言った？

復讐を諦め無い事が、良かつた？だと。

正直方向性は悪く、如月を説得できる可能性は低いと思つていた。話の方向を、犯人以外の開放にもつて行こうかと考え初めて居たくらいだ。

だけど、良かつたとは?どうこう事だ。

宮原が話を進める。

「じゃあね、私が手伝つてあげるよ。

この中の人には復讐したいんでしょう？いいよ。私手伝う。なんでもやるから言って。

ヤヨイちゃんは死ぬような目にあつたんだもん。

何やつたつていいよね。それこそ、殺しちやつたつてや。」

「ちょ、ちょっと、さつちゃんー?な、何言ひ出してるの?..」

「そうだぞ、宮原ー落ち着け、俺らは無事に帰らないといけないんだから。

如月ー聽いてるだろ。お前の事をこんなに想つてくれている宮原が

ここに居るんだぞ。

俺達の選んだ人間を無差別に罰するなんてやめて、せめていじめの犯人だけを残して、

残りは開放してくれないか？」

「うるせー！一人とも黙つてー私は、ヤヨイちゃんとの話してるのー。

ねえ、ヤヨイちゃん。私が手伝ってあげるね。

このクラスの人たちは、ヤヨイちゃんを殺したも同然なんだから、なんでもしていいよ。

うひふ

「ふふふつ。なーんだ。そう、協力してくれるのね。ありがとう。
さすが、親友ね。」

「うん。 そ、うだよ何でも言つて。

暴走する宮原に大して、みんなが一斉に声をかける。

「そんな、事約束したらダメ!」「何言つてるか分かつてんのアン

「御簾引ひやがれ」、「令嬢」御えみを「

俺達の話は止まらない! マズイ。この流れは、マズイ。何とか落ち

着いて、

宮原を落ち着かせる時間をつくるないと。

「ああもう、つるさいな。ねえ、サトネ。貴方の考える一人目の犯人って誰？」

俺達がアツと思つた時には既に宮原の口が開き、その言葉をスラスラと告げた。

「私は、一人目は山里ユウコだと思うわ。」

それは、この10人の中に明確に敵・味方が生まれた瞬間だった。

第六話 咲子の名前（南谷コウキ）（後書き）

中々話が進みません。
すみません。

時間が出来た時に、一度話を整理し直すかと思います。

第七話 逃れられぬ対決（佐々木ヨシノ）

「私は、一人目は山里ユウコだと思つわ。」

それは、この10人の中に明確に敵・味方が生まれた瞬間だった。

「ちょ、ちょっとなんでアタシが犯人になるのよ！」

状況についていけないわたし達の中で、ユウコがすぐに反論した。それは、反論というよりも反射だったのかもしれない。自分が犯人にされてしまう恐怖から、とっさに口を出した言葉。

二人の言葉が中々頭に入らない。

サトネは、ユウコが犯人だと言つて・・・それで、ユウコは、自分が犯人では無い。何で疑うんだと言つている・・・。

うん。その認識であつているんだけど。

頭が回らない、まるでテレビの中の映像でも見ているみたいに自分で考えることができない。

考えても、動けない。二人の世界に外側から干渉できない。

何で、ユウコを疑うのか？

その疑問はわたし佐々木ヨシノにとつても疑問だった。

疑問だと言えばサトネが何で暴走したのかも疑問だったけど、如月さんとの間に、わたしが考えるより深い感情があつたとすれば、完全におかしいわけじゃない。

今は何よりナゼ？サトネがユウコを犯人だと思つているかの方が重要よね。

記憶を探る。コウノとヤマハは元々そんなに接点が多く無い。いじめにつながるようなエピソードであれば、わたしも知っている可能性がある。

• • • • •

もしかして、サトネが疑っているのはアノ事なんじゃ？

「なんで？そんなのも分からぬの？ねえみんな分かるよね？」

見回すサトネの顔に田を合わせるのが怖くてつい俯いてしまう。もしかして、とこつ思いがあるものの、今のサトネにはとてもじやないけど言えない。

本能的に分かる。あれは、逆生で、たゞ怒らせてはいにたまない人の眼だ。何かを話かけたら取つて食われる。

「みんなも覚えてるはずよね。その三悪四悪が何をしたのかを
ねつ！」

貴方があの本の事で
イちゃんは
ヤミイちゃんを笑うたりしなかつたら
ヤミ

いじめられる事なんて無かつたのよ。」

やつぱり！

サトネが言つてゐるのは、ちよつと梅雨の時期にこのクラスで起きた事だ。

私はその時は、たしか別のクラスの友達としゃべりに行つてて。教室に居なかつたから後から聞いた話なのだけれど。

梅雨の時期、昼休みの教室はいつもより人が多くなる。

特に外で運動する部活は、雨のせいで昼練ができないからで、その日も多くの人が教室に居たそうだ。

ユウコは普段は教室に居るタイプじゃないんだけど。その日は、たまたま教室に居て、

友達とおしゃべりしているうちに、たまたま、近くに座っていた如月さんが気になつたらしい。

私の知つている限り、二人は親しい方じやなかつたから、本当にたまたま話かけたのだろう。

「如月さんって、どんな本読んでるの?面白い?」「

という感じだったのだろうか。

問題だったのは、如月さんがそのとき読んでいたのがたまたま、官能系の小説だった事だ。

まあ、大人しい感じのする。如月さんが、そういう本を読む事も、なおかつそんな人の多い教室で読んでる事も大分驚きなんだけど。本人の趣味と言えば趣味だ。

健全では無いけども、いやいや、ある意味じやそういう性に関する興味で溢れていっているのが

高校生としては健全なんだろうか?

私だって家で読んだ事はあるもんね。

可憐という感じの容姿で、詩集とか読んでいるのが似合つイメージの如月ヤヨイなだけにそれは本当に驚きだ。

とにかく、そこだけで話が終われば、如月さんも少し恥ずかしい思いをして、

その後は、そういう本は家で読む事になるだけだったんだろうけど、良くも悪くも・・・この場合は悪くなんだけど。山里ユウコはアクションの大きい娘だったんだ。

「 ちょっと貸して！」

「 えつ！？あつ！山里さん、まつて！」

「 小説？字多いねー。アタシこつひうの苦手ーなになに、えつ！やだ、うつそー！なにこれー。官能小説つてやつ？ こんなの良く学校で読めるよね。如月さんつて意外な事にムツツリスケベだつたんだー」

と、クラス中に聞こえる声で言つてしまつたそつだ。

クラス全体が騒然として、その日の昼休みはなんだか微妙に氣を使った雰囲気で終わつたそつだ。

ひそひそ、ひそひそとクラス中が噂しているつてイメージね。まあ、私はその日は全然そんな雰囲気に気付かなくて、その話も大分後になつてから聞いたんだけど。

クラスの女子の間では、じばらくは如月ヤヨイじゃなくて、如月エロイだね。とか、

官能小説家とか、呼ばれていじられていた。本人は、あんまりそういうマイナスをネタに出来るタイプじゃないし、

からかつても反応が薄いという事で、すぐに話題にならなくなつた。男子の方が食いついて、

「 実は、如月さんつて痴女？」

とか失礼な事を言つヤツがいたけど、そういうヤツは逆に女子から総スカンを食らつてたから殆ど一週間しないつち、たゞち誰も触れないネタになつたと思つ。

正直人によるんだらうかび、私とかユウコ辺りなら、この程度のネタはそれほど痛く無いし。

もちろん恥ずかしくはあるんだけど、このぐらいで、いじめつているのはちょっとなという思いがある。

シズクや、サトネ、ヤヨイだとやつぱりちよつとキツイのかもしけ

ない。

いじったり、いじられたりに疎くて、重く受け止めすぎる気がする。ツバサあたりなら、何となく自分の中で折り合い付けられそうな気がする。

「あの時の事、ヤヨイちゃんはずっと、ショックだったんだよ。みんなが私を見る目が変わったって言って。だから、そのきっかけを作った貴方が犯人。ここのみんなも証明してくれるわ。」

「な、なに勝手なこと言つてんのよ！ それ、あんたが考えただけでしょー。それに、そんな5月の頃の事が原因で今更自殺しただなんて信じられないわよ。」

「最近でも、ヤヨイちゃんの事をエロ女と呼ぶ事があつたでしょ？」

「そ、そりゃーたまには、いじめとかじやなくて。ネタでそういう言い方する事はあつたけど、そういうのって笑つて済ませるレベルの内容でしょ。こじめとか陰湿なものじや無かったのは、アンタだつてわかってるじゃない！ー！」

コウコの言葉は既に絶叫に近い。自分を追つ詰めようとする、サナネを殺さんばかりに睨んでいる。

「そんなの分からないわよ。貴方が遊びや、おふざけと思つていてもそれで傷つく人はいるのよね。とくに、純粹だったヤヨイちゃんは、みんなから淫らな人間だと思われる事がショックになつっていたのよ。」

「・・・・・っつ！ そんな事言つたら本当にショックだつたかどうか
なんて本人にしか分からぬでしょ！ なんで
アンタが宣言できんのよ！」

「できるわよ。だつて私はヤヨイちゃんの親友だもの」

怒鳴りすぎて、肩で息をしているユウコに對して、平然とした顔で
むしろ追い詰める事喜びを感じているかのようなサトネ。
二人の間には、殺氣のよつなものが進つてゐる。

「ねえ。もう時間過ぎてるんだよね。もう決定でいいのかな？」
いい加減手持ち無沙汰になつたのか黒い影が告げる。

「待て、如月考え方」

「いいわ、犯人は山里ユウコよ。」

南谷君の言葉を富原サトネが遮つた。

「ちょっと、待ちなさいよ！ それならアタシはこう主張する！ 犯人
は富原サトネ。自殺の動機は一方的な如月に對する思いが
強すぎて、精神的に追い詰められたため。これでどうよ！」

サトネの宣言に間髪入れずにユウコが噛み付いた。

「ちょっと待て、山里その展開はマズイ。落ち着け！」

「大神は黙つて！ こちは、良くわからない喧嘩吹つかれられて
んだ。正直もう、この先の展開とか
富原の事とか考へてる余裕なんてないわよ！」

「私と、ヤヨイの仲を疑うなんて最早愚かね。反論するまでも無いわ。」

「ふんー…どうだかね。とにかくこれで……よ。私は犯人じやない！」

「私も犯人では有りません。それじゃ、後はみんなに決めて貰いましょう。私とヤヨイの友情が正しいのか、それとも、それすら疑われてしまうのか。」

ここまで責められるまで、コウコはまだ今後の展開とか、説得を続けようとか、サトネへの気遣いとかを持つていた。でももう無理だ。全面対決は避けられない。如月さんを説得なんて状態じゃない。とにかくコウコで、どちらかに犯人が決まってしまうんだ。

私は、うまく動かない手を背中に押し付けた。本当は自分を抱きしめたい位だったけど、せめてとギリギリ自分の触れる範囲で小さく体を包んだ。けれど、結局包めずに余計に不安が心にのしかかった。

第八話 最初の犠牲者（鈴木ヨシヒコ）

「私も犯人では有りません。それじゃ、後はみんなに決めて貰いましょう。私とヤヨイの友情が正しいのか、それとも、それすら疑われてしまうのか。」

なんなんだこの展開？ぼ、僕には急すぎてついていけないぞ。

でも一方でどこか、安心している。ともかく、争ってるのが山里か宮原さんで決定だ。

今回僕が犯人に指定される事は、ほぼ無くなつた。

ふう、良かつた。やつぱり何か起こつた時は、大人しくしているに限る。

これまで、ほとんどと言つか、全く発言していない僕に注意を向ける人なんていない。

議論を引っ張るのは、大神君とか、南谷君とかに任せておけばいい。元々、クラスの中心でわいわい仕切つてる連中なんだ、こういう時も活躍してもらわないとね。

みんなが議論を進めているのをぼんやりと見る。

最早、止められない所まで対立しちゃつてる一人を雨宮君や、南谷君が何とかなだめようとしているみたいだ。

僕は当然発言する気がないので、考え方をしながら話を聞く。話を聞いて置くのは重要だ。

いつでも、流れを把握して目立たない位置にいかないとね。

僕、鈴木ヨシヒコの処世術はこれに尽きるんだから。

まあ、クラスでも目立たない方だし、成績も優秀でなく、スポーツも優秀でなく。

当然チヤホヤもされないけど、責任も回ってこない。そんな立ち位置が以外と好きだ。

自慢じゃないが、何かの委員長とか、部活のキャプテンとか一回もやった事無い。

無責任って事じゃない。

無責任てのは、責任のある立場なのに責任をまつとつしない事だ。僕の場合は責任のある立場が似合わないから、自分から行かないだけ。それだけ。

しかし、議論は進まないな。

僕の中の結論はもう出ている。この状態では、もうどちらかを犯人に指定するしか無いんだと思う。

今は、まだ如月（まあ本当に如月かまだ分からぬけど）が待ってくれている。

でもそのうちキレだしたらどうするんだよ？

もうこの段階で説得なんて成功しそうも無いし、元々説得なんてナンセンスなんだよ。

僕たちを閉じ込めるなんて、普通じゃない事するヤツに日本語が通じるわけない。

まあ、そう思つても言わなかつたけどね。

選ぶならどっちだろ？

まともじや無くなつてる富原か？

「南谷も、雨宮も甘い事言つてんじやないよー落ち着いても変わん

ない！ どっちにしたって、アタシか宮原か選ぶしか無いっての。」

山里が宣言する。今度は、誰も喋らない。反対してた二人も本当は、ビ�やつても選ばなきゃいけないって事は分かつてゐるんだと思ひ。

「今まで、黙つてゐるヤツはどうなのよ！ 鈴木！ アンタ何が言になさいよ。アタシと、こいつどっちが犯人！」

「…………」

な、なんで僕の事を名指しで指名するんだよ。こんな状況で、選べなんて責任ある事できるわけ無いだろ！ ふざけんな！

「…………」

「アンタ男でしょ！ ちよつとハッキリ物言いなさこいよ！ どっちなの？ アタシじゃ無いわよね！」

ふざけんな、ふざけんな。男だからって何だよ！

佐々木さんとか近藤さんとかもあんまし喋つて無いだろ？ 自分が男の癖について言い方するなり、お前は女の癖にもつとおじとやかにできないのかよ！

「…………」

「はあー。もうこれなら、宮原犯人じゃなくて鈴木犯人の方が良か

つたかもねー何も言わないなんて話になんない。」

！？！？

「…………ふざけんな…………そんな理由で犯人にされてたまるかよー山里ユウコに一票、お前が犯人だ！」

僕は思わず、そう叫んでいた。今まで全く自分が犯人に疑われる事を考えて無かつたからその反動だと思う。とつたに出てしまった。

「ちょっとアンター本気で言つてんの？ふざけんじやないわよー。」

「…………なんだよ。どっちか選べつて言つたのは自分だろ。ぼ、僕は選んだだけだよ…………ほら次の人」

僕は、発言していない近藤さんに目線を向ける。

「え？あの、私は…………」

そう言つて黙つてしまつ。

「はいはい、もう時間切れね。意見はまとめて無いみたいだけどこの際仕方ないね。

一番犯人として投票された、山里コウコに罰を下しますー。」

唐突に宣言された。

背筋がスッと寒くなる。なんて事だ僕の投票が最終的な決定打になってしまった。

くそっ、今はいいけど、次は次は最悪僕が犯人にされるかもしれない。

「ちよ、ちよっと、待ちなれ」

「はいはい、反論は認めません 今度からは、時間居以内に議論を終わらせてくださいね。」

「ふふ、やっぱり私とヤヨイの友情の正しさが証明されたみたいね。

ふふつ

怖い。この状況で何の躊躇も無く、罰を進行する如月を笑つて見ている富原が怖い。

やっぱり、富原だと黙つておくべきだったのだろうか?

感情で反発したのは間違いだったのか?

「やめて、やめて、ちよっと、ダメでやめてってばー。」

如月が山里の後ろに回り込むと、何かを取り出した。

あれは、注射器!?

まさか、毒!?

罰つていつのは、本当に僕たちを殺す事だったのか?

「おー、如月やめりーやめるんだー！」

「やうだ、やめりー殺すなー！」

「ヤローさんーやめてー！」

「つや、なに?えつ、やだ、やめてよ。ねえやめてー！」

みんな取り出した物に驚き、静止の声をかける。だけど、そんな静止の声も虚しく。

「アツ・・。いや、死にたく無い。死にたくないよう

針の刺さる所は良く見えなかつた。後ろ手に回してある腕の部分に刺したのだろう。

山里は針から逃れるように必死で体を動かしていたが、全身が固定された状態だ。

当然、抵抗ができなかつた。

針が刺さる所は見られなかつたが、それでも一言驚きの声を発した後。

山里ユウコの反応が極端に鈍くなつてきだ。

体が縛られているから、どんな反応をしているのかはつきとは分からなけれど、

少し震えるみたいに全身を揺らすと、その体が静止した。

「ユウコーねえ嘘でしょーー嘘でしょーー

女子がみな叫ぶー男子は何も言えずに田を離せずにいる。富原だけ

は笑っている。

「山里さんは、死なないかもしないわ。今打ったのはただの睡眠薬だもの」

「ほ、ほんどうか?」

希望を込めて雨宮君が尋ねる。

「本当よ、最も致死量超えてるかもしないけどね。正確な致死量つて分からぬから
もしかしたら本当に死んじゃうかもしないし、生きるかもれない。
それこそ、神のみぞ知るつて所ね。」

「な、なんでそんな事を……。」

「私は自殺をして、そして失敗して助かったんだもの。犯人に与え
る罰も、失敗したら助かるもの
それがフェアなんぢやないかしら。・・・・・・・・それぢや、
みんなまた次の時間に。」

如月は、本当に何事も無かつたかのよつに教室を出て行つた。

ついに、一人目の罰が執行された。

人に毒物を注射する作業を淡々とこなし、なんでもなく出かける姿
から、
嘘でも冗談でも無く、如月は皆殺しでもやつてのけるだらう。
そんな事を思った。

第九話 サトネの心（富原サトネ）

私の親友のヤヨイちゃんが死んだと聞いたのは、一ヶ月と3日前です。

私は、気が弱いところがあつてもう4ヶ月も同じクラスで過ごして、いるみんなとも

あまり上手く打ち解けられていません。

そんな、私にとつて生涯で一番大切な友達・・・それが、如月ヤヨイちゃんでした。

「やつちゃんは、もつと自信持つた方がいいって！」

「でも、やつぱり私、人と話すの苦手で。男の子とか怖くて、話しかけられるだけで固まっちゃう。」

「だったら、女の子なさいよな？」

「女の子でも、初めての人はやつぱり苦手だから。」

「だあーー！もう。ちょっとやつちゃんーーーい？誰だつて初めは初対面！そんな事言つてたら一生友達できなーいじゃない？」

「私は、・・・・・・ヤヨイちゃんが居るからいい。」

「あーもー、この子は可愛いんだからー。でもダメー・ツバサさん！一緒にお昼食べようよー。」

「こーわよ。富原さんも一緒に食べようよー。」

そんな風に教室の中でも、私がみんなの輪に入れるように気を使つてくれたし。

小学校の時からの友達で、一番私をよく知つてくれていて、私もヤヨイちゃんを一番よく知つていて、私もヤ

そんな関係でした。

この高校に来ることにしたのも、自宅から近くで程よい学力の高校

というのも

あつたかもしぬないけど、結局は一緒の高校に行きたかったからかもしれません。

いや、多分。絶対そうです。

私たちの間に秘密なんてなくて、お互いがお互いに一番に信頼しあえる親友でした。

私の前だと、いつでも引っ張つてってくれるキャラなのに、クラスの中だと大人しくて、”富原さんと如月さんって似てるよね”といわれる度に、嬉しかったから”そうでしょ”と言つていたけれど、

違つよ如月さんが素敵なんだよと心の中で思いました。口にはしなかつたけど。

中学の時に、ヤヨイちゃんに初めて彼氏が出来た時も。嬉しそうに私に報告してくれたのを覚えてます。

同じ部活の先輩で、それまで私と一緒に登下校していたのが、その日から先輩と一緒に登下校するようになつて。

「ゴメンねー サトネー 一緒に通えなくなつちやつたー」

「え? どうしたの、そんないきなり……。」

「ふ、ふうん。カレシー。」

「え？ か、か・れ・し？」

「そう！ 彼氏よ！ 昨日部活の先輩にこきなり告白されひやつて！ それが私が前からいいなつて思つてた先輩なの。も焦つちゃつてさ～。いきなり、”話があるから片付けの振りして最後まで残つて” なんて言われちゃつてや。ホントにドキドキよ！」。何言われるんだろ？ まさか、告白？ なんて妄想してたら本当に告白つて…？ もう、焦りすぎて心臓壊れるかと思つたよ。」

「や、やつ。良かつたじやない。念願の彼氏が出来て」

「本当にそうね～。それでね。明日から彼氏と、この響きこいわね。彼氏と登校することになつちゃつたから。しばらく一緒に登校できなーの。」めんね。」

手を合わせて、舌を出しながら嬉しそうに謝る彼女を見て、嬉しさとその先輩に嫉妬する感情がまぜこぜになつたのを覚えてます。結局先輩が卒業するまで付き合つて、それからはまた一緒に登校しました。

私が初めてラブレターを貰つたときにも、色々と考えてくれたのはヤヨイちゃんでした。

中学の時、私の下駄箱に封筒が入つて居て、家に変える前ヤヨイちゃんの家に行つてそのまま、

ヤヨイちゃんの部屋で相談しました。

私の部屋よりも、広くて女の子らしい小物も多くて。

”いいじやん、サトネは一人部屋でしょ？ おねえちゃんと一緒に

のも結構さー使うんだから、
といつのが口癖だったけど。

「あのね、私こんなのもひっかけたんだけど。」

「なにに？ ちょっとこれラブレターじゃん…すいこね…やつたじ
やない！ 相手は…・・・。ゲー！ 黒田かあ。」

「黒田君って良くないの？」

「うーん。あいつはまあ、別名玉碎の黒田、告り魔とまで呼ばれて
る男だからね。本気度低いかも。
顔は割といいんだけどね。サトネが、おとなしくして、可愛いから押
せば何とかなると思つてるのかもね？
で、で？…どうするの？」

興味津々といった感じで、私の田を覗き込ました。ちょっと尊話を
するおばさん達みなたいな、
ちょっと茶化すような聞き方で、でも、口調と裏腹に田は結構真剣
で私の事を考えてくれているみたいです。

「私・・黒田君の事よく知らないし。喋つた事ないし。ねえ、お断
りつて直接言わないとダメなのかな？」

「確かに、サトネと黒田つて接点無いもんね。良いんじゃない手紙
で、相手も手紙だつたんだし。」

「や、そうだよね。手紙、手紙・・・・・」

「うん~どうしたの黙つちやつて?」

「ね、ねえヤヨイちゃん。手紙つて何書けばいい?」

「ち、さとね~それくらい自分で考えようよ~。別にまつべ断つてもアイシは堪えないと思うし、そつけなくてもいいんじゃない?今はお付き合にする気は無いですか?別に好きな人がいますとか?」

「別に好きな人……。」

「おやあ?その反応はもしかして、サトネさんあなた好きな人がいるな?」

「な、何言つてるのかなヤヨイさん? そ、そんな事ないよ。」

「うひ、白状しろーもうネタは上がつてるんだ!」

「うふ、ちゅうとやめてつて。くすぐらないで、つてー。あ。もつてー!」

ともかく、私が何かをする時にはいつも居てくれるのがヤヨイちゃんでした。

一人っ子の私にとっては、リードしてくれるお姉さんのような存在であり、

気兼ねなく話せる友人でした。

そんな私にも、如月ヤヨイがなぜ死んだのかについての情報は教えてもらえたませんでした。

お葬式にもお通夜にも出ることができませんでした。
そう言つた事は身内の内で行われたそうで、私たちのクラスからは唯一クラス委員の三条さんが参加されたそうです。
なぜ、私が呼ばれなかつたのか、考えてみましたが分かりませんでした。

あるいは、いつもヤヨイちゃんの家にお邪魔していた私が行くと、ご両親が思い出しちしまつて苦しいのかもしれないとも思いました。

あの突然の死の知らせ。

その前日も、その前前日もいつも全く同じ様子であつたのに、若すぎる突然の死。

悲しみよりも、大きな喪失感だけが私を襲いました。
その日から、一週間は私は学校にいけないほどに、何のやる氣も出ない日を過ごしました。

ヤヨイちゃんの居ない人生に何の意味があるのでしょう?
ここまで、私の中の多くを占める人は、お母さんやお父さんでもなく、ヤヨイちゃんでした。

全てに近いものを失つた私は、すぐに回復する事はできません。
それでも、ここで脱落してしまつのもイヤでした。

高校すら卒業できなかつたヤヨイちゃんの分まで、せめて高校ぐらいいは卒業しようつと思つました。

悲しみの涙は、結局流していません。

私の涙の全てが止まつてしまつたようで、それから他の事でも泣けないのです。

あるいは、ヤヨイちゃんを失つた喪失感がひどすぎて、まだ日常を

現実として受け止められていないだけなのでしょうか？

そういうえば、彼女の死因などについては実は公表されていないのです。前日まであんなに元気だったのですから、病気なんてないでしょし、事故や事件なら隠す必要も無い事です。なのに公表されない。そのうち、自殺だったから公表されなかつたという噂が立つて。

それがいつのまにか、真実として広まつてしまつたのです。

そういうつた、現実感のなさが私がヤヨイちゃんの死をまだ受け入れられない原因だったのかもしれません。

そして、今夜。

ヤヨイちゃんは再び私の前に現れました。生きていた。奇跡的に生きていたんですね。私の心が歡喜で震えました。

生きている。

ヤヨイちゃんが。しゃべつている。

それだけで十分です。

なぜなら彼女が生きているんですから。

そして、彼女が告げた言葉は、私に深く突き刺さりました。彼女は告げました。

”みんなのせいで私は自殺した”
”この中の人にいじめられてたのが原因なんだ。”

彼女の死は自殺だったのです。
しかも原因はいじめだそうです。

相談してくれれば良かつた。

私は、特に何かできる力がないけれど。心配事は分け合いつから、友達だと思うのに。

それに、相談してくれるだけでも心は軽くなると思うのに。

ヤヨイちゃんが私達、いじめた本人以外のクラスメイトについても憎く思うのも当然です。特に私は、このクラスの中で一番ヤヨイちゃんに近い所にいたのですから、

私が一番気づかなければ行けなかつたのに。

でも、ヤヨイちゃんは私にチャンスをくれました。

”誰が私をいじめていたのか気づいたら助けてあげる”

そうです。前は気づけなかつたけれど、
いまから、遅いけれど犯人を当てる事ができれば、ヤヨイちゃんの復讐に参加できる。

そう！私とヤヨイちゃんと復讐するのです。

一度自殺するところまで、ヤヨイちゃんを追い込んだ犯人を。

そう心に決めていた所で、

みんなの議論が始まりました。

話としては、誰を選ぶかというよりも、

ヤヨイちゃんをどうやって説得するかという方向に行こうとしています。

私は不満でした。みんな自分が助かりたいのは、わかるけど。

ヤヨイちゃんを説得し、みんなが助かる道。

結局それでは、弥生ちゃんの心は満たされないのだから。

”俺は如月への説得は、富原一人にお願いしたいと思つていい。”

大神君のこの言葉を聞いて、私は説得なんて成功させる必要はないし。

説得する振りさえすればいいと思いました。

幸い、私とヤヨイが親友なのはみんなが知っていますし、

私が説得するという流れは自然なのでしょう。

だから、私は告げました。

「私、やってみます。」

第九話 サトネの心（高原サトネ）（後書き）

しばらく風邪でダウンしてました。とつあえず、ここでひと区切りです。

今までの文の推敲とかに少し時間を使おうかなと思っています。

第十話 悪意（大神タタシ）（前書き）

ちょっと、短編に走つてました。すみません。
一応今回から2時限目です。

第十話 悪意（大神タダシ）

ふう。何でこんな事に巻き込まれてんだろ？

如月が出ていった後の教室は、しばらく喧騒に包まれた。

俺は、今までこの場を何人かとともにリードしてきたけど。ちょっとと考え事をしていたので、あえて止めはしなかった。

なんたって、俺こと大神タダシは犯人なんだから。人より考えなきや生き残れない。

とりあえず、みんなの話の矛先は、突然裏切った宮原サトネと、突発的に、山里を犯人扱いした、鈴木ヨシヒコに向いている。

「何で、「ウ」を選んだのよ！」「宮原さん……。どうして……。」

「じゃあ、どうしろって言つんだ。こきなり言われたらこいつちだつて……。」

「うふふ。あはは。だつてね、私はヤヨイちゃんの味方だから……。」

議論しても無駄。というより、議論の余地はない。

宮原は、もう狂ってる。説得という手段はもうない。

鈴木は、不安因子としてみんなの心に残った。味方になるやつは居ないだろ？

次の犯人はこの一人のうちどちらかで決まりだ。そして、その次の時間にもう一人も罰を受けるだろう。

時計を眺める。

すでに時刻は、10時20分だ。
一回目の話が延長したためだ。最後には、如月もじれていたみたいだから、引き伸ばせても
結局こんなものなんだろう。

最初の話合いの時点で、10時過ぎてしまえば、家の人が心配して探し始める。

という、話だつた。すでに、10時は超えている。警察などの捜索が始まっているとしたら、どれだけ長く見積もつても、2時間以内に学校も捜索範囲に入るだろつ。

そうすると、如月が犯人を罰するのは、11時の時点が最後という事になる。

だが・・・・・・・・・。

俺は、最悪の事態についても想定しなければならないと考える。

最初は、まだ悪戯の可能性があつたが、もつこれは悪戯レベルではない。

俺は、3つ隣の席に座らされている山里コウコウを見つめる。
隣の席でないから、本当に殺されているのかは分からぬが、見たところ全く動かない。

死んでいるのか、あるいは眠らされているのか？

あいつの話通りだとしても、致死量近くの睡眠薬を入手しなくちゃならない。

人を一発で昏睡させる薬物を用意し、なおかつ注射器まであるなんて有り得ない。

準備に手間がかかりすぎる。

基本的に致死性薬物なんて一般人には手が届かないはず。ネットなんかで、無理やり入手するにしても決して安くは無いはずだ。

悪戯にしちゃ度がはずれてる。

全く。小さく頭を振る。

犯罪性が高くなればなるほど、悪戯の線は薄くなるんだ。本当勘弁して欲しい。

そして、これが悪戯で無いなら。

捜索に対する妨害も、当然取られているだろう。

俺達の携帯はみんな取り上げられているし、ここにはクラス委員の三条が居る。

携帯から、それぞれの親に適当な理由を作つてメールし、折れない親には、三条の名前携帯を使って対応すれば、一晩位なら親も怪しまないかも知れない。

一晩・・・・・。

その長さに、絶望すら覚える。

一晩経つて、人が探しにくるのは何時だよ。早く見積もつて6時、遅く見積もつて7時が妥当か？

一体何回その前に、犯人探しをするのか。

11時。12時。1時。2時。3時。4時。5時。

最低でも後、7回、多ければ8回逃げ切らなきやいけない。

7回という事は、残り2人。8回という事は、残り1人・・・・・。
いや、1対1になつたら最早決まらないから、
7回まで終了かもしれない。

ともかく、今大切な事はあとを見越して仲間をつくる事だ。
最初の1・2回は良いが後々になると仲間が居るかどうかで大きく
変わつてくる。

絶対的な仲間。

俺は、心の中でほくそ笑む。

俺には一人だけ絶対の仲間がいる。

それは、もう一人の犯人だ。

そう、俺は如月を一人でいじめたわけじゃない。

もう一人居るんだ。

山里は可哀想だが、巻き込まれただけで、本当の犯人では無いだろ
う。

だから、まだこの中に犯人がもう一人居る。

俺は、そいつの方に目を向けた。

目があつた時のそいつは、分かつてると言った気がした。

さて、どうするか。

上手く立ち回る事。それが問題だ。

基本は、今まで通り話の中心に居るのが良いと思う。

そのためには、今まで議論を引っ張ってきたメンバーを考える必要
がある。

積極的に発言しているのは、

俺、雨宮、南谷、三条

消極的なのは、

宮内、近藤、佐々木

死亡したのが（便宜上）

次に罰せらるであらうのが

宮原、鈴木

消極的発言組みはとりあえず無視していいだろ。議論の主導権を握るには、先に積極的に発言している側の人間を削る必要がある。

俺は、三人を順に見回す。
隣の三条、一番黒板に近い雨宮、ほぼ対称の位置に居る南谷。
それぞれ、考え方をしながら、みんなを収めるのに必死だ。
ふむ。この中なら、南谷に活躍してもらいうのが良いか？

俺は、なんだか自分の感情が高揚しているのを感じた。
狂つてんのかな、俺は。この難しくて、自分が死ぬかもしれないって状況をゲームみたいに楽しもうとしている。
死ぬかもしれないスリルと、正解の無い問題をどう乗り切るかに今までにない位頭が働いている。

「ごめん。みんな俺はこんな所で死ぬ気は無いんでな。犠牲になつてくれ。

「ちょっと良いかな？確かに、一人のやり方は悪いと思つ。だけど、もうそれを議論している場合じゃないよ。
見てくれ、時間がもう一〇時半だ。」

みんなが俺に注目したのを見て、さらに言葉を続ける。

「それと、ついでだが一番最初の話で、俺達がここに監禁されている事に外の人が気付くとしたら、10時以降だらうと話したの覚えてるか？」

今は、まだ来ていないが、もしかしたら助けが来るかもしれないし、三条さんどれくらいで助けが来ると思う？」

「え、えーと。そうね、10時つていうのも推測だつたから、少し余裕を見て、10時半の今から1時間以内には来る・・・のかな？来て欲しい。」

「うん、まあ俺もそのくらいの読みだと思つ。つまりさ、後犯人指摘する回数も1回しか無いかもしれないって事が言いたかつたんだ。」

「

三条に話を振る事で、俺一人が話を進めている雰囲気を薄めつつ。さらに核心に迫る。

みんなの顔が少し明るくなる。

そうだ。誰だつて助かりたいんだ。

俺だつて助かりたいわ。

俺はわざとらしくない程度に、言った。

「後は、誰がその一人になるかだよ。申し訳無いけどその人が決まれば、後の人には助かるんだから。」

みんなが黙つてしまつ。

仕方ない、自分からやりたいなんてヤツはいないし、誰を蹴落とす
かつてのも難しい。

俺は、待つた。後は、嵌るのを待つだけだ。

この中に、正義感が溢れている男がいるのを知っていたから。

みんなの沈黙さえそいつを追い詰めていく武器になる。

普段から、クラスの中心で熱血漢丸出しなこいつがこれに反応しないハズがない。

今も葛藤しているに違いない。

そして、自分で自分を追い詰めているんだ。

「いいよ。俺が行く。・・・・・俺が次の犯人だ。」

そう告げたのは、俺の見込んだ通り南谷だった。
また、俺は心の中でほくそ笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0682w/>

疑う円環

2011年11月17日20時04分発行